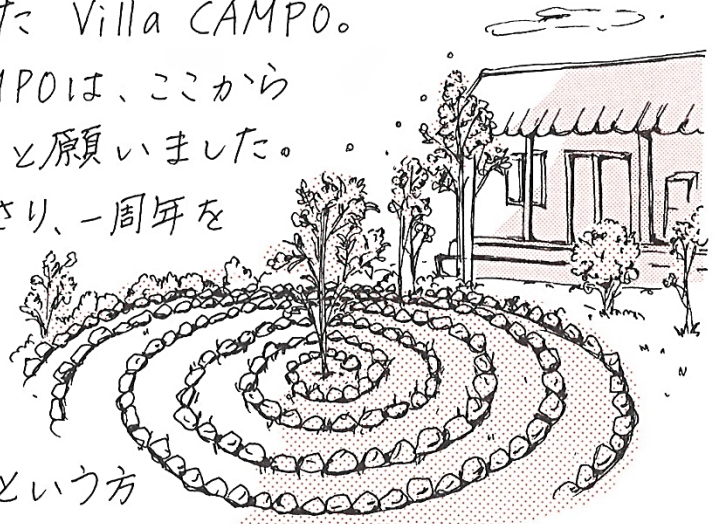


Villa CAMPO 1周年に寄せて

船戸博子

2020年10月にオープンしました Villa CAMPO。
オープンの際に、「Villa CAMPOは、ここから
皆様に育てていただきたい」と願いました。
そして、多くの方が来てくださり、1周年を
迎えることができました。



病気の療養にいらっしゃる方
日常から離れて過ごしたいという方
遠くにはでかけられないので近くでのんびりという方

滞在理由は様々ですが、おかえりになるときの皆様の笑顔を見るたび Villa CAMPOをスタートさせてよかったと思うのです。

不定期開催ではありますが
リトリート(=仕事や生活から離れた非日常的な場所で自分と向き合い、バと身体をリラックスさせるためにゆったりと時間を過ごす旅のスタイル)も様々な趣旨で開催されています。

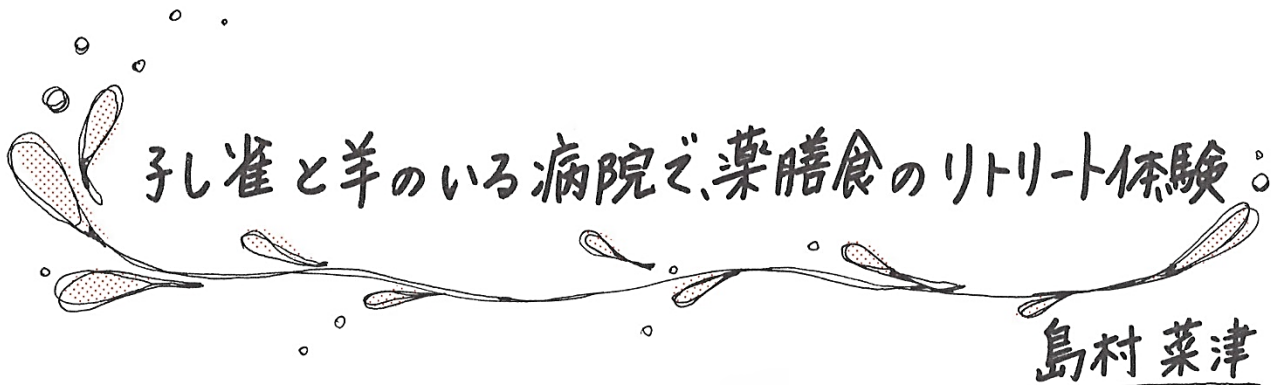
あなたがあなたらしく生きることを考えたり
取り戻したりする場として Villa CAMPOが
ありつづけたら嬉しいと思います。



以前開催された『にんじん CLUB』主催のリトリートにノンフィクション作家の島村菜津さんが参加してくださいました。

その島村さんが、正食協会誌「おすび」に Villa CAMPO を素敵に紹介してくださったので、こちらでもご紹介したいと思います。

～ 以下「おすび」2021年10月号より転載～



孔雀と羊のいる病院で、薬膳食のリトリート体験。

島村菜津

名古屋で「にんじん CLUB」という有機野菜を軸にした宅配を続けてきた伊勢戸由紀さんから、久しぶりに連絡が入った。

再会にあたってイベントの案内も送られてきたが、とりあえず顔を観るのが目的とろくに読まずに出かけた。

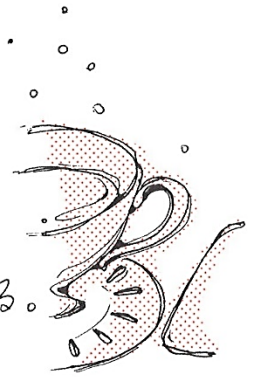
目的地の名は『ヴィラ・カンポ』。

カンポはイタリア語で菜園だから、自家菜園があるオーベルジュをぼんやり想像していた。

ところが、大垣駅まで迎えに来てくれた伊勢戸さんの車で現地に向かった先は、岐阜県養老町の『船戸クリニック統合医療センター』。そこは病院ではないか。

内バ、病院に集うのはもっと晩年でもよくないかと思っただが、目に飛び込んできたのは、入口で食司われた羊たちだ。奥にはろし雀までいるそうで、のっけから病院の概念をゆさゆさと揺るがす。

裏の宿泊施設も白壁に青い扉の地中海風で、キッチン付きの広いお部屋でハーブティーと手作り焼き菓子を口に放る頃にはすっかり「機嫌」である。



リトリートは、元来、隠れ家や療養所を指すが、昨今は、遠く離れた地で、仕事や人間関係のストレスから解放され、心身を癒すといった竟に転化している。しかも今回は「にんじんCLUB」35周年特別企画、2泊3日のリトリートだという。

一方、船戸クリニックは、94年の開業時から東洋医学や代替医療も取り込んできた病院で、院長の船戸崇史先生は、自らも腎臓がんを経験し、2018年には、がん予防滞在型リトリート「リボン洞戸」を岐阜県関市で開業。

その著作『がんが消えていく生き方』（2020年ユサブル）によれば、心身を病む我慢、義務、犠牲の3つ生活を改め、身体を養う睡眠と食と運動、免疫力を上げるカロ温とバを豊かにする突いのり本柱を大切にすることを施設だという。

そして昨年、コロナ禍の最中にオープンした『ヴィラ・カンポ』の最大の引力は、その妻で漢方医の船戸博子先生のユーモラスで温かなお人柄だった。

母が子をみるように接する。

個々の体質や体調に合ったオーダーメイドな療養というわけで、まず短い問診を受ける。

そこで過去の病歴などを伝えようと口を開くと、博子先生が、やおら、これを制し、マスクの上の大きな瞳がじっとこちらを見つめる。それからおもむろに、左胸上部の気の流れが異しく、足指に時々しびれがあるなど、怖いほどその時の体調を言い当てたので面食らってしまった。漢方、恐るべし。

自由に選べるメニューも多様で、予防やダイエット目的の人も多いので医療脱毛やビタミン療法、中には前世療法などという突飛なものまである。

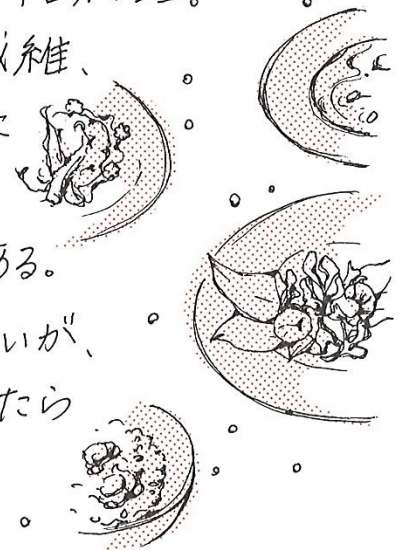
興味深かったのは温熱療法で、免疫を増やし、抗炎症作用をもたらすヒートショックプロテインの研究者でNHKの「ガッテン!」などにも出演した伊藤要子先生が、自ら施術してくれる。

だが、何といたってもお楽しみは朝と晩の薬膳料理。

夕食は旬の野菜やきのこ、海藻など食物繊維、発酵食品中心、オメガ3を含む良質な油に特化したフルコースで、薬膳茶も供される。

昼も、病院内に薬膳カフェ「フナクリ食堂」がある。

病院食は往々にして見た目も味もぱっとしないが、こんな養生食堂付きの病院が各地に増えたら楽しいし、病院のイメージも変わる。



白い割烹着姿で自らサーブする博子先生の食後の「おくすりなお話会」がまた傑作だった。

その席で目診を重んじるわけを訊くと、こんな返事がかえってきた。

「漢方の世界では、熱に解熱剤を出すのは下医、どうして熱が出たの、疲れていますねというのは中医、上医になれば、脈診も舌も見ず、顔を見ただけでわかる」。

母が子を見るように患者に接するのが上医だという。

漢方一筋40年、22年前にようやく中医学の師を見つけたという。

翌日は475種の生薬の棚も見せていただいた。



現代の医師はタラシで診断も流れ作業だが、バスのエキスパートと、これほどゆったりした時間を過ごす場は、ありそうではなかった。

敷地内には生薬と野菜の畑もある。そこで愛犬を連れて何やら収穫する先生の姿を目にした2日めの朝。

生薬を盛り込んだおかずには薬味がつく百合根とクコの朝がゆは、先生自ら調理してくれた。!



巣ごもりで日々の食へのありがたみも薄れていた中、徐々に「ご馳走さま」にバを込めて三食を丁寧^{ちそう}にいただいたことが、何より新鮮だった。